# 魔法少女まどか☆マギカ　～人魚の歌声～

icsbreakers

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まどか☆マギカ　～人魚の歌声～

【Ｎコード】
Ｎ９０４９Ｚ

【作者名】
ｉｃｓｂｒｅａｋｅｒｓ

【あらすじ】
あるとき美樹さやかは白井雪良から一緒に魔女を倒して欲しいと頼まれる。
その実行日は見滝原中で開催される年に一度の文化祭の日。
楽しい文化祭と、魔女退治。
さやかの波乱の一日が幕を開ける。

## 前日　１６：００（前書き）

文化祭編の開始です。

まったりと連載していきたいと思います。

## 前日　16：00

秋空もすっかり見慣れたこの頃。

夏の熱気にあふれた光景はまったく無く、あるのはゆっくりゆっくりと落ちていく枯葉ばかりだ。

そんな中、見滝原中学校はその光景とは正反対の賑やかな風貌を見せていた。

明日は年に一度の文化祭。

各クラス、各部活が各々の見世物をより良く見せようと躍起になっていた。

美樹（みき）さやかもそのうちの一人だった。

さやかは同級生の梶浦優子（かじうらゆうこ）がやっているバンドの演奏を手伝うことになった。

そのための練習でここ一ヵ月音楽室に篭りっぱなしだった。

「さっすが、ミキティ。筋がいいわぁ」

ドラムセットを前にして座る優子が手を叩いて褒め称えた。

「やるからには徹底的にやらないと気がすまないのよね」

さやかはそう言いながら辺りを見渡した。

「そういえば白井さんは？」

ボーカルを担当する白井雪良（しらいせつら）がいなかった。

「せっちゃんはたぶん西棟の空き教室じゃないかなぁ？」

「なんでまた？」

「昔から本番の前日には人気の無いところで心を落ち着かせてるのよ。この学校に来てからは西棟の空き教室がその場所になってるのよ」

「へぇー」

さやかは未だに雪良に言われたことが気になっていた。

”私は変なことなんて言ってないよ？あなたと私は似たもの同士なの”

あの言葉の意味が何なのか、前は聞くタイミングを失ってしまい、結局聞けなかった。

「私、ちょっと様子みてくる」

「そう？んじゃ、せっちゃん連れ帰ってきてよ。前日だし、ちゃんと皆で練習しておかないとさ」

「うん、わかった。ちょっと行って来るね」

さやかはギターをおろすと、音楽室を出て行った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

西棟は主に生徒が自由に使える空間として用意された変わった棟だ。図書館や校内カフェテリアなどの施設、生徒が様々な用途で使用できる多目的教室を設けている。

多目的教室では委員会などの会議から部活動の練習場などとして使用されているが、教室数もそれなりに多く、使用頻度もそれほど高くないため、よく空き教室化していた。

さやかもカフェを利用するために西棟にはよく来るが、ほかの教室に目を向けたことなど今までなかった。

さやかは優子に教えられた場所にたどり着くと、とりあえず窓から教室の中を覗いた。

「あれ？いない……。すれ違ったのかなぁ」

「すれ違ったって誰と？」

「！！？」

さやかは突然背後からした声に、声にならない悲鳴をあげた。

「し、白井さん！？」

背後に立っていたのは雪良だった。

「私を探しに来たの？」

「そ、そう！そうなのよー！」

「ふーん。まぁ、いいわ。私もちょうど美樹さんにお話があったから」

雪良は教室の扉を開けて中に入った。

そしてさやかを手招きして中に入るように促した。

雪良はさやかが教室の中央くらいまで行ったのを確認すると、扉をしめた。

「ここって西棟の一番端なの。だから誰も来ないし、いくら大きな声出したって聞こえないわ」

「へー……そう――――」

扉を背にして、まるで扉を守るように立つ雪良。

その雪良の顔にはどこか妖艶さが漂っていた。

さやかはその顔に妙なざわめきを感じた。

「あ、あの……話って」

さやかは雪良から目を離し、思いついた言葉を放った。

雪良はさやかの言葉を無視し、さやかに詰め寄った。

「え、えっと……」

さやかは距離を置こうと一歩下がった。

だが雪良がまた一歩つめる。

それを繰り返しているうちに、さやかの背は教室の壁についてしまった。

「だからっ、いったいなんな———」

目の前に頬を少し赤らめ、目を閉じた雪良の顔がいつの間にかあった。

声にならなかった。

なぜならさやかの唇は雪良の唇によって塞がれてしまっていたのだから。

文化祭の準備でざわめく外の音が、静まり返った教室の中に響き渡っていた。

## 前日　16：10

さやかは突然の出来事に一瞬気が遠のいていた。

だがすぐに頭の中に今起きた出来事が猛スピードで再生され、一気に顔が熱くなった。

「なななぁー！？」

さやかは訳のわからない奇声をあげた。

雪良はクスリと笑った。

「人魚の歌声。それが私の魔法よ」

「ま、魔法……？」

さやかの中で熱くなっていたものが一気に冷めていった。

魔法という言葉。

それがさす意味はたった一つだ。

「白井さんも魔法少女？」

「そう。美樹さんと同じ、魔法少女」

「でもそれとき、キスは関係ないんじゃ……」

さやかは自分で口にしたことが恥ずかしく、何だか落ち着かない気持ちになった。

「私の『人魚の歌声』は聞いた相手を魅了させることで、動きを封じるものなの。夢中で周りが見えなくなるって感じかな」

さやかは、問いに答えることもせずただ淡々と語る雪良に少しムッとなった。

「だからそれとこれとは――――」

美しい歌声が聞こえた。

その歌声の前ではすべてが雑音に思えてしまうくらい美しかった。

さやかはハッとした。

その歌声が目の前にいる雪良から出ているものだと理解すると同時に、『人魚の歌声』の能力が発動してしまっていることに気がついたのだ。

「あ、あれ？」

気がつくことが出来た。

周りが見えなくなる魔法にかかってしまっているはずなのに、しっかりと思考できているのだ。

「『人魚の歌声』を聴いた人みんなが術中にはまってしまったら大変でしょ？だからちゃんと回避する方法があるの」

そう雪良に言われ、さやかは思わず指で自分の唇を触った。

「キス……」

「そう。正確には私の口を塞ぐこと」

雪良は自分の口に両手の人差し指で作ったバッテンをあてた。

「塞ぐこと……？ってじゃあ、キスじゃなくていいんじゃないの！」

「うふふ。サービスよ、サービス」

「そ、そんなっ、サービスいらんわっ」

慌てふためくさやかに雪良はクスクス笑った。

「ごめんね。ちょっとからかい過ぎたわ。でもただ無闇に私の魔法を回避させたわけじゃないの」

「ど、どういうこと？」

さやかは真面目な顔でそう言う雪良を見て、釣られるようにしておとなしくなった。

「美樹さんに協力して欲しいの」

「協力って？」

「魔女を一緒に倒して欲しいの。絶望の魔女・レイアーノを———」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9049z/

---

魔法少女まどか☆マギカ　～人魚の歌声～

2011年12月29日10時55分発行